

不確実性の高い現代に 必要なことを広告から考えてみる

東日本大震災から7年

7年後の世界での新年度スタート

年度が変わる4月の時期には転機を迎えた方も多かったかと思えます。私が勤めている大学にも新メンバー（新入生）が入ってきました。札幌圏から通ってくる学生が大半ですが、道内のさまざまな地域から親元を離れて入学してこられる学生も多々います。慣れない独り暮らしと大学生活のスタートにいろいろな思いを抱いているんじゃないでしょうか。

そして、今年も東日本大震災から7年後の世界です。大学の新生が小学校高学年までの出来事だったことです。当時のことを思い出すと、地震の揺れを感じた直後は、あれほどまでの被害が出るとは予想もできませんでした。その後、数回でメディアから流れてきた惨状を凝視しつつ、恐怖と不安な気持ちで生活が変化していきました。学生たちも子どもながらに日常の変化を敏感に感じ取っていたはずです。そして7年たった今、まだ震災の

しめ跡と向き合っている方も多いと思えます。各地でも、さまざまな災害が起こりました。私自身も、7年前に感じたザワザワした不安や恐怖が、日常生活をパタパタと過ごしている中で、徐々に和らいできてしまっているのを感じます。ただ、それと同時に「日常がいつも同じ状態のままなわけがない」という意識もずっと頭の片隅にあります。もう震災前の意識には戻れないですし、戻ってはいけないうちもいます。昨日までの当たり前と向き合っていたことが、明日には「ロケット」変わってしまうという社会の変化も激しくなっています。東日本大震災はそれを自然面からも示された出来事だったのかも知れません。

日本人は不確実な事象に
向き合っている苦手だ！

最近、「エンジニアリング組織論への招待」の著者の広木大地さんが書かれている「ラムダ」を読んで思わず「へえ」とうなづいてしまいました。国や地域の文化的添って生きていくために大切な要素もこれですね。

あいまいで不定形な状態を
具体的な形にするチカラ

新入生が卒業して次の道を進むころ、社会は今と何が同じで、何が変化しているのでしょうか。予測のつかない状況を楽しむには、変化を楽しむチカラも重要です。そして、その変化を生み出すには、「想像」と「創造」が原動力になるといつ気になります。学生にはデザイン学部の4年間で、あいまいで不定形なイメージを具体的な形に換えて表現できるチカラを、ぜひ培ってほしいなと思います。そして、つくった人材育成をサポートするところが震災後の日本をつくるべく、いつの間にかも、2011年の震災当時に漠然と思っていたことを、新聞を読みながらかと思いつきました。

今日の授業は「これ」。

特性を数値化して比較する「ホフステール指数」(ホフステール指数ともいわれています)「いつものがあつて、日本は「不確実性を避けたい」と考えてしまつて」傾向が2015年版では65の国・地域の中で10位と比較的、強く出ているそうです。世界でも有数の火山・地震国であり、自然の変化に敏感に接してきた地域特性がある日本なのに、ちよつと不思議な結果な気がします。広木さんはさらに「アジャイル開発」が日本で理解が進まないことを引き合いに出して、日本人の不確実性へ向き合えない体質に触れています。アジャイル開発とは、きつくりした「開発と修正を素早く何度も繰り返しながら、つなげるべきモノを模索する方法」であり、「わからない物事にどうやって合理的に向き合うかの方法」として、アメリカの特にIT業界で発達しました。ですが、このアジャイル開発のルーツは戦後の日本の企業文化にあつたようです。戦後復興の中で、さまざまな市場のニーズに流動的に対応する

ために、家族のようなチーム(会社)を作つて高度経済成長を果たした日本。それを見たアメリカは同様に、対話重視のチームで試行錯誤するプロセスを構築し、復活しました。今、アメリカから逆輸入する形で、低迷する日本が変化を求められているという不思議な状況が起こっています。先が見えない不確実性の高い世界では、変化への対応が重要です。でも、自らを変化させることはリスクを伴う可能性もあり、なかなか大変です。不安です。よね。そのリスクという言葉には「危険」という意味のほかに「結果を予測できる度合い」「予想通りにならない可能性」という意味もあります。変化を漠然と捉えているだけでは不安な気持ちが膨らんでばかりいきますが、できる限りの予測を立てるリスクの度合いをきちんと把握するべく、その状況をつくることが、不確実性と寄り添うためには必要なのかもしれません。



2 「北海道コンソードレ札幌」2018年3月2日 朝刊 全道版 全15段



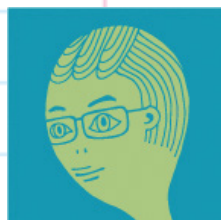
1 「全労済」2018年3月11日 朝刊 全道版 5段2/1

参考・引用文献

- [1] 広木大地 (2018) 日本にアジャイルが普及しづらい本当の理由, 技術評論社, パソコン友の会 < 電脳会議 vol.185 >
- [2] Hofstede (2015) Dimension data matrix, <https://geert Hofstede.com/research-and-vsm/dimension-data-matrix/> (2018.04.16 閲覧)
- [3] goo 辞書, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/230974/meaning/m0u/> (2018.04.16 閲覧)



3 「キッコーマン」2018年3月3日 朝刊 全道版 全15段



ふくだ ひろとし
福田 大年

札幌市立大学デザイン学部専任講師 (教育学修士・造形修士)

1975年、北海道生まれ。デジタルコンテンツ制作会社の起業などに携わった後、2008年より現職。専門はインタラクティブデザイン、デザイン教育。最近ではアイデア生成、遊びのデザイン、地域産業サポートなどに取り組む。学会、広告団体、キッズデザインなどでの受賞歴あり。

